近代瀬戸の風景

明治38(1905)年に、矢田～瀬戸間で瀬戸自動鉄道（後に瀬戸電気鉄道、現：名鉄瀬戸線）が開通すると、現在の尾張瀬戸駅周辺はやきもの産業だけでなく、商業・金融の中心地へと発展していきます。瀬戸川北岸（北新谷（きたしんがい）地区）の丘陵には、窯屋の居宅や陶磁器卸問屋が建ち並び、深川神社門前などには商店街が軒を連ね、賑わいをみせていました。現在でも北新谷地区には、そこで居を構えた有力窯屋や資本家・卸問屋などの商店・居宅・工場が一部残され、当時の隆盛を偲ぶことができます。

煙突がたくさん立ち並ぶ！

同じほこら

1 中心市街地遠望（西から）

昭和 12(1937) 年頃の中心市街地。瀬戸陶磁器会館（現：愛知県陶磁器工業協同組合）の屋上から撮影した写真です。昭和初期に広く普及した石炭窯の煙突からは黒煙が舞い上がり、黒くかすんだまち全体が、瀬戸窯業の盛況ぶりを物語っています。

2 尾張瀬戸駅

昭和 6（1931）年頃の尾張瀬戸駅。この駅舎は大正時代から平成 13（2001）年まで使われました。現在は瀬戸蔵ミュージアムに一部復元展示されています。

3 深川神社前

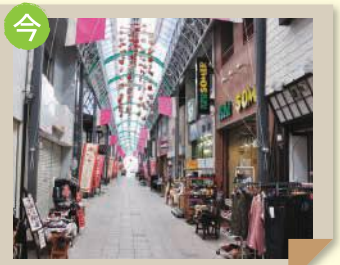
昭和初期ごろの深川神社前の様子。毎月15日と月末がやきもの職人の給料日で、翌日が休日であったことから、当時瀬戸を代表する歓楽街であった参道周辺は人で溢れかえっていました。

4 茶屋町

深川神社参道の西側にあたる深川町の一角。写真中央、路地の奥には映画などを上映した「深川館」が写っています。深川館となったのは昭和3(1928)年からで、それ以前は芝居などを興行した「陶元座」がありました。

5 せと末広町商店街

昭和初期の末広町商店街の様子です。当時は現在のようなアーケードはかけられていませんでした。



6 蔵所町付近

昭和 13(1938) 年の蔵所町周辺の様子です。写真右手にはかつてこの場所にあった市役所が写り、その右隣には現在新世紀工芸館の展示棟となっている、瀬戸陶磁器陳列館などが並んでいました。現在この場所は瀬戸蔵となっています。

7 煙突が立ち並ぶ蛭子橋付近

現在の宮前駐車場から 200m ほど東に入ったところの風景。昭和 10(1935) 年頃のもので、石炭窯の煙突から、当時窯屋があったことがわかりますが、現在は住宅街となっています。

㊐ 写真提供：フォトスタジオ伊里